

病害虫発生予察特殊報第 3 号

害虫名 トマトハモグリバエ *Liriomyza sativae* BLANCHARD
発生作物 きゅうり、トマト、なす、インゲン

1 発生の経緯

平成 13 年 9 月、下伊那地区の施設栽培きゅうりにおいてハモグリバエ類による被害が発生し、南信農業試験場にサンプルが持ち込まれた。このハモグリバエを横浜植物防疫所に送付し同定を依頼したところ、本県未発生のトマトハモグリバエであることが確認された。その後の調査で上伊那地区南部での発生を確認し、またトマト、なす、インゲンなどでも発生していることを確認した。

本種はマメハモグリバエ（本県では平成 4 年 5 月 7 日付け特殊報発表）の近縁種で、平成 11 年に沖縄県、山口県、京都府で発生が確認され、その後西日本を中心に生息確認が相次いでおり、本年も神奈川県、山梨県、東京都、愛知県などで確認されている。

本県で発生を確認したのは今回が初めてである。

2 形態

成虫は体長が 1.3~2.3mm、体色は全体に黒色で、頭部や体の側面、脚などは黄色である。既発生種のマメハモグリバエやナスハモグリバエと酷似しており、肉眼での同定は困難である。正確に同定するには、雄交尾器を顕微鏡下で観察する必要がある。幼虫は淡黄色のウジ虫状で、3 齢幼虫の体長は約 3mm である。蛹は長さ 1.3~2.3mm の俵型である。

3 生態と被害

- (1) 雌成虫は産卵管で葉に開けた穴の内側に、卵を産みつける。幼虫は葉肉内を食害潜孔し、不規則な線状潜孔痕を形成する。老熟幼虫は葉から脱出して蛹化する。被害状況や蛹化の方法はマメハモグリバエとよく似ている。これまでハモグリバエ類が問題になることがなかったキュウリで多発する傾向が見られる。果実での食害は見られない。
- (2) 1 世代の期間はマメハモグリバエに比べてやや長く、卵から成虫になるまでは 20℃で約 27 日、25℃で約 18 日、30℃で約 14 日である。発育零点は 9.6℃とされている。

4 寄主作物

マメハモグリバエと同様に、ウリ科、ナス科、マメ科、キク科、アブラナ科など極めて多くの植物に寄生する。国内で寄生が確認された植物は以下のとおりである。

ウリ科：キュウリ、メロン、スイカ、カボチャ、シロウリ、マクワウリ、ヘチマ

ナス科：トマト、ナス、ピーマン、ペチュニア、テリミノイヌホオズキ

マメ科：インゲン、ソラマメ、アズキ、ダイズ、ササゲ

キク科：マリーゴールド、ゴボウ、シュンギク

アブラナ科：ハクサイ、キャベツ、ダイコン、カブ、コマツナ、ブロッコリー

アオイ科：オクラ

5 防除対策

- (1) 既発生地からの苗の移出入に注意し、苗は定植前に十分調べ潜孔痕のあるものは定植しない。
- (2) 施設の開口部には寒冷紗などのネット（目合い 1mm 以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- (3) 摘葉や、収穫後の残渣は次作の発生源になるので、ほ場外へ持ち出して処分する。
- (4) ほ場およびほ場周辺の除草を行い、ほ場衛生に努める。
- (5) 次作への発生を防止するため、発生ほ場では収穫終了後、施設を密閉し、蒸し込み処理を行う。
- (6) トマトハモグリバエに対する登録薬剤はないが、マメハモグリバエを対象とした薬剤の効果が期待できる。

(参 考) トマトでマメハモグリバエに対して登録のある散布薬剤

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数
アフーム乳剤	2,000 倍	収穫前日まで	2 回以内
オルトラン水和剤	1,000 倍	収穫前日まで	3 回以内
カスケード乳剤	2,000~4,000 倍	収穫前日まで	4 回以内
コロマイト乳剤	1,500 倍	収穫前日まで	2 回以内
スピノエース顆粒水和剤	5,000 倍	収穫前日まで	2 回以内
トリガード液剤	1,000 倍	収穫前日まで	3 回以内

トマトハモグリバエ



トマトハモグリバエによるキュウリの被害



トマトハモグリバエ蛹

トマトハモグリバエ成虫（体長約 2mm）